

地雷系のきさらは

お尻ぺんぺんが好き！

第1話

酔って帰ったらお尻ぺんぺんされてぴえん



※体験版

目次

第一章：つい飲みすぎた夜

第一章：つい飲みすぎた夜

きららはその日も、友達と一緒に夜の街を満喫していた。大学からほど近い繁華街の奥まった場所にあるバー「Lunar Eclipse」。

ここはきららの定番スポットで、薄暗い照明と甘いカクテルの香りが漂う、彼女にとって最高の逃避行先だった。

カウンターの端に陣取ったきららは、今日も完璧

な地雷系コーデを決めていた。

黒地にピンクのレースがふんだんに使われたミニスカート、裾にはフリルが何重にも重なり、歩くたびにふわふわと揺れる。

髪はゆるふわのツインテールにリボンをあしらい、メイクは濃いめのアイラインとピンクのチークで、まるで人形のような可愛さを演出していた。

「きららー、今日も可愛すぎ！ 街中の男が振り返

ってるよ！」

友達のあかりが、隣の席から身を乗り出して言った。あかりはショートカットのボーイッシュな女の子で、今日はシンプルなＴシャツにデニムという対照的な格好。

もう一人の友達、みゆきはロングヘアをポニーテールにまとめ、眼鏡をかけたいわゆる地味可愛いタイプだ。

三人は高校からの付き合いで、大学に入ってから
もこうして週に何度も飲みに出かけていた。

「えへへ、ありがとー。でも今日はちょっと控え
めにしないと……たーくんに怒られちゃうかも。」

きらはグラスを傾けながら、甘えた声で言った。
グラスの中身はピーチとオレンジが混ざったトロピ
カルカクテル。甘い香りが鼻をくすぐり、一口飲む
たびにアルコールがじんわりと身体に染み込んでい
く。

すでにビール二杯とショットを三杯空けていて、
頬はほんのり赤く染まっていた。スマホを手に取り
と、たーくんからのメッセージが並んでいた。

「今日は早く帰ってきてね。明日のデート楽しみにしてるよ。飲みすぎないように。体調崩したら困るから。約束だよ？」

メッセージには、少しだけ絵文字が付いていない。
いつもならハートのスタンプが並ぶのに、それが無いだけで、きららは少し胸がざわついた。

でも、お酒が入るとそんな心配もすぐに吹き飛んでしまう。

「うーん、もうちょっとだけ飲んじゃおうかな。
たーくんには後で謝ればいいよね。」

きららは自分に言い聞かせるように呟き、バーテ
ンダーに新しいカクテルを注文した。今度は度数の
高いリキュールが入った、鮮やかな青色のもの。

グラスがカウンターに置かれると、氷がカランと

音を立て、きららは嬉しそうにストローをくわえた。

三人の会話は尽きることがなかった。大学のサークルで起きた面白い出来事、最近ハマっているアイドルの話、誰かが付き合っているという噂話。

そして当然のように、きららの彼氏であるたーくんの話題にも及んだ。

「たーくんってさ、きららのことめっちゃ大事にしてるよね。デート前日なのにこんな時間まで飲ん

でるって知ったら、絶対怒るよ？」

みゆきが心配そうに言うと、きららは笑って首を振った。

「大丈夫だよー。たーくん優しいもん。ちょっと怒っても、すぐ許してくれるんだから。」

本当は少し不安だった。たーくんは普段は穏やかで優しいけれど、約束を破られると本気で怒るタイプだ。

きららは何度か同じ失敗をして、そのたびに「お仕置き」を受けていた。それは、とても恥ずかしいお仕置き。そう、「お尻ぺんぺん」だ。

最初は恥ずかしくて嫌だったけれど、痛みの後にくる彼の優しい抱擁が、きららにはたまらなく心地よかった。

痛いのに、愛されている実感が得られる。あの時間が、きららにとって特別なものになっていた。

お酒が進むにつれ、きららの下腹部に違和感が生まれ始めた。膀胱が少しずつ膨らみ、温かい液体が溜まっていく感覚。

最初はほんの軽い圧迫感だった。座った姿勢で足を軽く組み替えるだけでやり過ごせる程度。

でも、カクテルをもう一杯追加すると、急に重みが増した。

「うう……ちょっとおしっこしたくなってきたか

も。」

きららは小さく呟き、太ももをそっと擦り合わせた。まだ我慢できる。でも、トイレに行くために席を立つのが面倒だった。友達との会話が楽しくて、席を外したくない。

「もう少しだけ、もう少しだけ。」

自分に言い聞かせながら、またグラスに手を伸ばした。

時計の針は容赦なく進み、午前 0 時を過ぎ、1 時を回っていた。バーの店内は徐々に客が減り、BGM のボリュームも少し落ちてきていた。

きららはふらつきながら立ち上がろうとして、テーブルに手をついた。

「やば.....ほんとに遅くなっちゃった。」

あかりとみゆきが心配そうに顔を見合わせる。

「タクシー呼ぶ？ 一緒に帰ろうか？」

「ううん、大丈夫。ありがとねえ。」

きらは笑顔を作って手を振ったが、足元はすでにふらふらだった。店を出ると、冷たい夜風が頬を撫で、酔いが一気に回ってきた。

タクシーを拾い、シートに深く沈み込むと、下腹部の圧迫感が急激に強くなった。

車が走り出すと、振動が膀胱を直撃した。液体が揺れ、出口を押す感覚が何度も襲ってくる。

きらはシートに身体を沈め、太ももをぎゅっと締めて耐えた。指先でスカートの裾を握りしめる。タクシーのカーブごとに膀胱が揺さぶられ、ピリッとした痛みが走る。

温かいものが少しずつ出口に近づいている気がして、恐怖が込み上げてきた。でも、酔いのせいで頭がぼんやりしていて、集中して我慢するのが難しい。

ようやくアパートの前に着いた。運転手に料金を
払い、よろよろと降りる。階段を上る間、一段ごと
に下腹部がズキズキと疼いた。

鍵を差し込む手が震え、ようやくドアを開けた瞬
間――

そこに立っていたのは、鬼のような表情のたーく
んだった。

リビングの照明が彼の顔をはっきりと照らしてい

る。眉間に深い皺が寄り、腕を組んで静かに立っていた。いつも優しい目が、今は冷たくきららを射抜いている。

「きらら。」

低い声。抑揚がほとんどない。それが逆に怖かった。

「た、たーくん……お、おかえり……じゃなくて、
ただいま……。」

きららはよろめきながら靴を脱ごうとして、壁に
手をついた。お酒の臭いが自分でも分かるほど強く、
頬は真っ赤に染まっている。

「遅いよ。どれだけ待ったと思ってるの？」

た一くんは一步近づき、きららの腕を掴んだ。力
は強くないのに、逃げられないほどしっかりしてい
た。

「ご、ごめん.....つい盛り上がっちゃって.....。」

きららは目をうるうるさせて見上げる。甘えた表情で許しを請ういつもの癖。でも、たーくんの表情は変わらない。

「お酒、飲みすぎだね。明日のデート、どうするつもりだったの？」

きららは下を向き、唇を噛んだ。下腹部の尿意はもう限界に近く、立っているだけで膀胱が圧迫されて痛い。足を内股にし、もじもじと身体を揺らす。

「まずは.....トイレ、行きたい.....。」

小さな声で訴えたが、たーくんは首を振った。

「ダメ。先にお仕置きです。」

その言葉に、きららの心臓が激しく跳ねた。

寝室に向かう廊下を歩く間、きららは必死に我慢していた。歩くたびに液体が揺れ、出口がヒクヒクと痙攣する。

もう少し、もう少しだけ耐えられる。でも、たー
くんの背中を見ながら、きららは分かっていた。

今夜は、長いお仕置きになりそうだ。